

# 米国聖公会の朝鮮人教会と趙光元

— ハワイへの越境と抗日独立運動<sup>(1)</sup> —

松山健作

## はじめに

趙光元は、日本帝国下における朝鮮<sup>(2)</sup>からハワイに越境<sup>(3)</sup>した朝鮮人である。彼はハワイに越境することで、ハワイの抗日独立運動組織である国民会と接触し、植民地朝鮮の独立のために地道な運動を継続した。同時に彼はキリスト教信仰者であり、彼のハワイへの越境の目的として表面的にはキリスト教の福音を伝える伝道者という側面があった。趙光元は、1945年朝鮮が解放され、1950年朝鮮戦争がはじまると同時に日本において伝道者として6年間滞在し、母国に帰国後、韓国教会内でエキュメニカル運動を推進した人物として、大韓聖公会はもちろんのことながら韓国カトリック教会にも影響を与えた人物である。しかし、彼の痕跡は、ハワイ、日本への越境を重ねることにより複雑な歩みをなしており、資料的限界とともに韓国の教会史研究はもちろん、教派内でも注目されず今日に至っている。

当時の朝鮮聖公会の体質は、日本帝国の統制下で政治的事柄に沈黙あるいは、中立の立場を宣言し、抗日独立運動とは距離を置いた。趙光元はこの状況において、抗日独立の姿勢を示した聖職者として、ほぼ唯一の存在である。本稿では、趙光元のハワイへの越境を通して、彼を形成したハワイの朝鮮人教会の状況を考察し、同時に当時の朝

鮮聖公会の姿勢と対照することで、彼の歴史的な存在意義について考察を試みる。取り扱う時代範囲に関しては、朝鮮人がハワイに移住した1902年ごろから抗日独立運動という語が示す通り、朝鮮が日本帝国に支配されていた1945年までを取り扱うことにする。

## 1. 先行研究について

先行研究については、まず李徳姫の「ハワイの韓人聖公会教会」<sup>(4)</sup>が挙げられる。彼女は、ハワイにおける移民史、抗日独立運動史、また解放後、韓国の大統領となった李承晩研究の専門家であり、特にハワイにおけるキリスト教会史研究、思想史研究においては、重要な成果を残し、彼女が近年発表した論文の一部で、趙光元について概観的に扱っている。しかし、彼女の論考では、日本帝国植民地下の朝鮮聖公会の特性について十分に考察されていないため、趙光元の歴史的な位置が不明瞭である。そのため、朝鮮聖公会の抗日独立運動への姿勢とハワイの聖公会朝鮮人教会を比較することで浮上する状況の差異と趙光元という人物が形成されたハワイの背景について、考察する必要がある。

以上の事柄について考察する上で、李在禎『大韓聖公会百年史』<sup>(5)</sup>が朝鮮聖公会についての重要な先行研究である。しかし、李在禎は植民地下に

おける趙光元についてわずかしか触れておらず、独立運動家としての趙光元の痕跡について、教派内の分析がなされていない現状である。本稿では、これらの2つの先行研究を土台に、朝鮮聖公会を築いた英国人宣教師たちの報告書である *The Morning Calm*<sup>6)</sup> を駆使することで、ハワイの朝鮮人教会と朝鮮聖公会の独立運動への姿勢を明らかにし、趙光元が編集や執筆に携わった『国民報』<sup>7)</sup> を駆使することで、趙光元の痕跡や人物像について叙述し、分析することを目的とする。

## 2. 朝鮮人のハワイ移民

まず朝鮮人のハワイ移民について、概観する必要がある。朝鮮人のハワイ移民は、1902年末から1905年8月のごく短期間に実施された農業労働者の移民政策であった。この間に、およそ7,800名の朝鮮人がハワイへと移動した。しかし、この7,800名のすべてがハワイに定着したわけではなく、およそ2,000名が1910年までに米国本島に移住し、さらに1,000名は朝鮮に帰国している<sup>8)</sup>。ハワイの移民社会において、数として圧倒的にマイノリティーであった朝鮮人の移民は、当初よりキリスト教との密接な関係を持っていた。なぜなら、1902年末にハワイへの農業移民を目的とした朝鮮人移民政策は、当初より教会内の米国人牧師たちが仲介者としての役割を果たすことで成立した事業であった。当初は、医師であり、米国北長老会の宣教師であり、駐朝アメリカ公使であったアレン (H. N. Allen, 1859-1932) が仕掛人となった。アレンは、朝鮮人の農業移民募集を企てた東西開発会社デシュラー (David W. Deshler) と組み、それに米国メソジスト教会宣教師のジョーンズ (G. H. Jones, 1867-1919) が朝鮮人の移民労働者としての派遣に成功したこと

を契機に開始された。1902年12月に仁川内里教会を中心とする121名の朝鮮人信徒たちが最初のハワイへの移民者として、朝鮮を旅立った。移民者は初期からほとんどがキリスト者という状況で、伝道師がこの農業移民者に当初より同行していた。移民者たちは、ハワイという楽園で果物を摘みさえすれば、アメリカンドリームを掴めると説得され、米国というキリスト教国に順応するために、受洗していない移民者は事前に洗礼を受ける必要があると教えられ、渡航したのである。それゆえ未信徒の場合でも渡航中の船上で、同行している牧師から洗礼を受け、キリスト者になるという例も見られた。朝鮮人移民政策は、1882年の中国人移民禁止法成立後、1898年頃から賃金の安い労働力として朝鮮人が注目され、政策的に開始された。当初より朝鮮人移民政策は、半ば不法的な奴隷輸出に近似する政策であると認識しながら、米国宣教師たちが推進した<sup>9)</sup>。

以上のような移民政策が実施され、ハワイにおいて朝鮮人社会が形成される。同時に彼らの本国である朝鮮は、まもなく日本によって植民地化されようとしている時期であり、ハワイにおける朝鮮人の同胞社会は、後に抗日独立運動の本拠地になる。特にその中心を朝鮮人キリスト者たちが担ったことは、上記の状況からも推測できる。ハワイの朝鮮人キリスト者の中心は、ほとんどがメソジスト信徒であり、ごくまれに聖公会、救世軍などの信徒が含まれていた。1906年には、ホノルル朝鮮人教会において、朝鮮人寄宿学校が設立され、移民者の二世に対して国語などをはじめとする民族教育が開始された。同時に教会機関紙も刊行されるようになり、朝鮮人同胞の民族意識が積極的に語られた。1907年9月には、ハワイ各島の24の朝鮮人団体が「韓人合成教会」を組織し、1909年には米国本土の団体である「韓人公立協会」と

合同することによって「大韓人国民会」<sup>(10)</sup>が結成された。この組織は、後にシベリヤや満州といった抗日独立運動が武装闘争によって、積極的に繰り広げられる地域に人材を派遣して、朝鮮内の抗日独立運動を支援する原動力となった。しかし、1914年頃から朝鮮外の地域における抗日独立運動勢力は、分裂しはじめる。105人事件の際に逮捕を免れた李承晩(1875-1965)が教会と独立運動組織において自らの勢力を強めようとし、ハワイの独立運動の中心にいた朴容萬(1881-1928)が対立することで、ハワイにおける朝鮮人キリスト教社会は二分される。これにより朴容萬は国民会を、李承晩は異なる朝鮮人組織である同志会を結成し、本国の独立という同じ目標を掲げながらもハワイ内で緊張関係を保持し、二つの組織が別々に活動した<sup>(10)</sup>。

以上、このように分裂したハワイの朝鮮人キリスト教社会のなかで、数的にマイノリティであった聖公会の朝鮮人信徒たちは、初期より朴容萬の率いる国民会を支持し、抗日独立運動のために活動する。後に論じる趙光元も、これら国民会の影響を当然のことながら受けた。

### 3. 米国聖公会における朝鮮人教会の形成

ハワイへの朝鮮人移民者に対して、ハワイのメソジスト教会と組合教会は、宣教活動を民族ごとに分担することで合意した。具体的にメソジスト教会は、日本人と朝鮮人を対象とし、組合教会は中国人と先住民を対象にした。一方で聖公会(The Hawaiian Reformed Catholic Churchの後にハワイ併合以降 Episcopal Diocese of Hawaii)は、先住民、移住民を問わず、宣教活動に取り組んだ<sup>(12)</sup>。

当時のハワイ王国に聖公会の宣教団が上陸した

のは、1861年12月16日のことであった。宣教団の上陸は、ハワイ王国のカメハメハ四世(Kamehameha IV, 1834-1863)と王妃エマ(Queen Emma, 1836-1885)の要請によるもので、主教ステイラー(Thomas Nettleship Staley, 1823-1898)の到着によって開始された。ハワイ王国の王室と聖公会との結びつきによって、宣教活動は、比較的円滑に実施される<sup>(13)</sup>。ハワイ王国からは、教会建設、学校設立のための要地が宣教団に寄贈され、1862年10月には主教座聖堂である聖アンデレ主教座聖堂(St. Andrew's Cathedral)が完成し、最初の礼拝が捧げられた。他にもマウイ島のラハイナ(Lahaina)に男子校が設立され、後にホノルルに移転されイオラニ学校となる。同時に王妃エマの意向によって、主教座聖堂に併設される形で聖アンデレ女学校(St. Andrew's Priory School for Girls)が1867年5月に設立された。1898年には、ハワイ王国が米国に併合(United States Annexation of Hawaii)されることによって、1901年にハワイ聖公会は、米国聖公会の一つの教区(Episcopal Diocese of Hawaii)として吸収され、1902年7月2日主教レスタリック(Henry Bond Restarick, 1854-1933)が接手され、派遣される<sup>(14)</sup>。

朝鮮人の移民政策が開始されたのは、ハワイ王国が米国に併合され、それと同時にハワイ聖公会から米国聖公会ハワイ教区への変遷後である。朝鮮人と米国聖公会教会とののはじめての接触は、1904年5月に崔鎮泰(John Choi)という人物が、通訳者と共にコハラ(Kohala)地域にあった聖オーガスティン聖堂を訪問したことはじまる。移民者のなかには、少数ではあるが聖公会の信徒がいたことが推測される。崔鎮泰はこの際、聖オーガスティン聖堂を司牧するスミス(W. H. Fenton Smith)に朝鮮人が礼拝するための使用

許可を求めた。彼の願いは許可され、朝鮮人たちは聖堂で聖書を読み、オルガンの伴奏ないなかで讃美した。当時の様子についてスミスは、主教レスタリックに宛てた手紙で「朝鮮人たちが教会に入り、靴を脱いだ後、膝をついて敬虔に祈るため、他の信徒たちに感銘を与えている」<sup>(15)</sup>と報告している。しかし、当時の米国聖公会ハワイ教区には、当然のことながら朝鮮人を司牧できる聖職者は存在せず、すでにキリスト者であったと思われる崔鎮泰を信徒奉事者<sup>(16)</sup> (Lay Reader and Preacher)として任命し、彼が朝鮮人最初の伝道者としてコハラ地域で活動した。彼の尽力ゆえ、コハラ地域では200名ほどの信徒が、ケヘナ地域では30名程の信徒が教会に通っていた<sup>(17)</sup>。

ホノルルにおいても、数人の朝鮮人が聖アンデレ主教座聖堂において、朝鮮人への宣教を実施するように要請し、1906年から金翊成という人物を中心として、朝鮮人信徒たちが集い、礼拝を捧げるようになった。1908年には、レスタリックがこれらの朝鮮人を聖エリザベス聖堂に移動させ、朝鮮人の信仰共同体が形成された。元来、聖エリザベス聖堂は、1902年10月に中国人移民者に対する教会として設立され、後に朝鮮人信徒たちにも同じ空間が提供されるようになった。聖エリザベス聖堂を司牧するポットワイン (W. E. Potwine) は、英語で聖書を教えるなどし、主日は、中国人たちよりも1時間はやい10時より、朝鮮人のための礼拝を捧げた。レスタリックは、聖エリザベス聖堂における中国人と朝鮮人の共同体について「これは付加的な仕事といくつかの不都合が必然的に伴うが、しかし特に不平もなく聖エリザベス聖堂のスタッフによってなされている」<sup>(18)</sup>と報告しており、特に中国人と朝鮮人の民族的な緊張感によって事件が生じなかったことを示している。当時のハワイ移民社会のなかでは、

多様な人種、民族が混在していた。それらが起因し、あるいは民族間の俸給の差異からもたびたび民族間の対立、ストライキ事件が生じていた。しかし、そのような葛藤事件も教会といった限定された空間では、少なからず目に見える形では生じていなかった。

崔鎮泰は、信徒奉事者として任命されると同時に現地の宣教師たちとの疎通が必要であったため、イオラニ学校で英語を学ぶことになった。同時に朴丞駿という江華島出身の男性も英語を学ぶことになった。朴丞駿は学校を卒業し、1911年より信徒奉事者として伝道活動に加わることになる。このように欧米宣教師たちは、朝鮮人に英語を習得させ、ハワイでの伝道活動をより円滑に推進しようとしたことが窺える。これらの朝鮮人信徒奉事者の地道な働きにより、聖公会の教会に集う朝鮮人たちは、徐々に増加しはじめた<sup>(19)</sup>。1908年には、朝鮮人二世たちのためにハンゲルを教えるハンゲル学校が設立され、それを金翊成が主導した。彼は1914年まで校長として勤め、翌年に朴相夏、1916年には権聖根、朴丞駿、趙炳堯が校長になった。学生数は1917年に60-71名、1921年には66名、1924年には47名、1928年には54名、1930年には55名であった。学費は1924年に年間47ドルで、教師の月給が支払われた。趙炳堯の後、後に考察する趙光元が校長となり1941年まで勤め、同年12月7日の日本による真珠湾攻撃によってハンゲル学校は閉校となった<sup>(20)</sup>。

ここで暫し、ハンゲル学校に関わった人々について言及する必要がある。上記ですでに名前をあげた朴相夏、朴丞駿、趙炳堯、趙光元は、すべて国民会のメンバーであった。それゆえ、聖公会の教会の朝鮮人信徒と国民会の繋がり、かなり密接なものであったと分かる<sup>(21)</sup>。朴丞駿もまた国民会が法人となる際に申請者の一人であったことか

ら、国民会の重要な位置にいた人物であった。国民会は、そもそも日本帝国によって朝鮮が1905年に保護国とされ、1910年には、国権を失うなかで、国民を代表し、代弁する政府の役割を担った政治的組織である。しかし、この国民会はハワイの朝鮮人社会において、初期は力を有したものの、ハワイの朝鮮人社会が国民会と李承晩率いる同志会と対立することで、主導権を失いつつも、ハワイの朝鮮人社会において、抗日独立運動を持続的に推進し、その原動力となっていたグループであった。この国民会と聖公会の教会の繋がりについては、ペタソンが指摘している通り、教会が信仰的共同体であったというより、政治色の強い共同体であったというように、国民会と教会との繋がりが、その要因であったと見られる<sup>(22)</sup>。

国民会と非常に密接な関係のあった聖公会の教会が運営したハングル学校は、次第にその生徒数を増加させ、1910年代には、常に40人程の学生、また夜間には信徒に対する英語学習の機会を提供するなどの取り組みが実施された。つまり、教会において朝鮮人二世たちには、本国の言葉や歴史、文化などが教授され、一世たちには、ハワイで労働するために必要な英語力が提供された。他にも教会では礼拝はもちろん、聖書勉強会、少女部、婦人会が組織されており、聖公会の朝鮮人教会は、次第に活発化していた。このような状況下において、1913年に朴丞駿が神学を学ぶためにサンフランシスコに派遣され<sup>(23)</sup>、彼の務めていた信徒奉事職の後任に朴相夏が指名された。朴相夏は国民会総会長に就いていたが、同ポストを辞任し、信徒奉事者として専念することになった。これらは抗日独立運動を重要としながらも、また教会における牧会的任務の重要性を優先する朝鮮人信徒たちの姿勢として評価できる。

サンフランシスコの太平洋神学校で学んだ朴丞

駿は、米国聖公会で司祭按手を受け、1916年7月11日にハワイ教区の朝鮮人教会に赴任した。彼の帰還にともない150名の人々が教会に集まり、宣教師たちは朴丞駿の同胞社会における影響力に驚嘆した<sup>(24)</sup>。翌年には、聖ルカミッション（St. Luke's Mission）という独自の名称を持つことが認可され、依然として教会建物は聖エリザベス聖堂内で実施されていたものの、いよいよ朝鮮人のための教会を保有する準備がなされていた様子が窺える。朴丞駿は、ホノルルの聖ルカミッションとコハラ地域の朝鮮人教会を司牧するが1918年12月突如辞任し、その後不動産業に転職する<sup>(25)</sup>。朴丞駿のあとを引き継いだのが、信徒の趙炳堯である。彼は1906年当初より聖公会の教会と密接に関わっており、また国民会とも深い関わりがあった。趙炳堯が聖ルカミッションを委任された際に、聖歌隊、朝鮮語による公祷文の印刷が行われ、朝鮮人信徒が母語による公祷文を持つことは、聖公会の信徒にとって非常に重要な出来事であったと考えられる。同時に聖ルカ聖堂建築資金のための献金も集められ、朝鮮人信徒のための聖堂建築が具体化しつつあった<sup>(26)</sup>。

このような朝鮮人信徒が独自の教会を持つか否かの状況において、1923年に趙光元が朝鮮聖公会から派遣されることになる。

#### 4. ハワイに越境した趙光元

##### ① 朝鮮聖公会の体質と趙光元の派遣

朝鮮半島に聖公会系の宣教団 SPG（The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts）が上陸したのは、1890年9月に初代主教コーフ（Charles John Corfe, 1843-1921）が済物浦（現在の「仁川」）に到着したことにはじまる。宣教初期は、外国人居留地という限定さ

れた地域で、医療、教育、文書伝道を中心に居留地の英国人と日本人、中国人への伝道活動からはじまった。宣教師たちは、朝鮮語を修得し、次第に朝鮮人と接触することが可能になり、1897年にはじめて朝鮮人に対して洗礼を授けることになる。聖公会が朝鮮半島に上陸したのは、長老会やメソジストという教派から比べるとその出発は5年程遅れた後発のものだった。宣教団間では、すでに宣教地域の区分けがなされており、聖公会の教会は、その初期、共同の宣教地域であるソウル、まだ手つかずであった江華島を中心に朝鮮人に対する伝道活動がなされた。特に聖公会の宣教において、江華島は重要な地域であり、有力な信徒、聖職者を輩出した今日の大韓聖公会の聖地として形成されることになる<sup>(27)</sup>。趙光元も江華島出身の人物であり、英国人宣教師から直接影響を受け入信した。

朝鮮半島に上陸した聖公会系の宣教団は、後にも先にもSPGのみであり、日本のように米国聖公会、SPG、CMS (The Church Missionary Society)、カナダ聖公会など、いくつかの宣教団が訪れたわけではなく、さらにそのなかでもCMB (Corean Missionary Brotherhood) というカトリック主義に基づいた独身宣教師のみの集団であった。彼らは典礼を重んじ、独身を保守し、俸給を厭わないという三つの原則のもとイングランドで訓練された人々であった。彼らの特徴は、政治や社会の葛藤とはある一定の距離を置き、敬虔なカトリック主義信仰を追求する姿勢を見せる。そのため、彼らが上陸した朝鮮半島は、まもなく日本帝国によって侵略されるにもかかわらず、それらを非難するような政治的姿勢を明確に示すことはなかった。と同時に、彼らは当初より居留地内で伝道活動を行っており、初期より在朝日本人に対する伝道を実施した。それゆえ、彼らの伝道

地は、ソウル、江華島を中心に釜山、元山、平壤など海岸沿いを中心に拡張されるが、上陸した先々で在朝日本人にも接触して教会形成を行った。1894年の日清戦争、1904年の日露戦争によって、在朝日本人が徐々に増加することで、宣教師たちは朝鮮人のみならず、在朝日本人への伝道にもより力を注いだ結果、朝鮮聖公会は、当初より朝鮮人信徒と在朝日本人信徒を保有していた。

宣教師たちは、政治的事柄に関わらないとし、移民政策によって実際に移動してくる日本人を受け入れ、朝鮮半島のなかで在朝日本人伝道をいかに展開し、拡張しようかと苦悩した点は、植民地政策を進める日本政府にとっては、評価されうる部分であった。初代主教コーフは1904年に突如辞任し、二代目主教ターナー (Arthur Beresford Turner, 1862-1910) は、政治的な事柄には干渉しない<sup>(28)</sup> (non-interference) としながらも中立的な立場を示すことができず、むしろ親日的な姿勢を明確に示したのであった。また1910年からはトロロップ (Mark Napier Trollope, 1862-1930) という第三代主教が就任するが、彼もまた就任時に教会と政治との関係において中立性を保持することを宣言しており、「先住」の人々に対する伝道活動を実施する意志を明確に宣言している。彼における「先住」とは、つまり朝鮮聖公会の朝鮮人信徒、あるいは在朝日本人信徒、少数ではあるが英国人信徒の三者を意味するものであった。

特に植民地との関連においては、主教トロロップの姿勢、組織的体質について論じておく必要がある。彼は、元来朝鮮人伝道の初期メンバーであり、主教コーフと同時期に朝鮮内において、朝鮮人に対する伝道を主に担当した宣教師である。もちろん、在朝日本人信徒とも接触することもあったが、彼は1902年まで朝鮮人に対する伝道に従

事した。その後、一時帰国という扱いで1902年に英国に戻り、しばらくウェストミンスターで司牧していた。しかし、1910年にターナーが急逝し、トロロップを主教にする話題が浮上し、また英国より朝鮮に引き戻された。彼は朝鮮上陸当初より朝鮮人を対象に伝道活動に従事した人物として、朝鮮人に対する同情心が見受けられる側面がある。日清戦争の際も日清が朝鮮という地で戦争することに対して批判的な声を挙げるなど、ある意味で親朝的な人物であった。しかし、時代が変化することで、1910年「韓国併合」という状況に対して、彼の外面的な姿勢はやや親日的に変化することが生じたのか、あるいは主教という立場がそうさせたのか、朝鮮に戻る際に「私が朝鮮に行くのは、個人的な願いではなく、また朝鮮と朝鮮人に個人的な関心があるわけでもない」<sup>(29)</sup>という言葉を残している。これは、ある意味で当時の政治的状況をよく把握していたトロロップであったからこそ、時代を無難に乗り切るために発せられた彼の表向きの言葉であったとも考えられる。と同時にトロロップが親朝的であることを批判する在朝日本人伝道に携わる聖職者<sup>(30)</sup>も存在したために、それらを鎮静させる意図もトロロップの言葉のなかに含まれるだろう。

もう一点注目しなければならないのは、トロロップの在任中に生じた3・1独立運動に対する姿勢である。この事件の対応を評価することで、朝鮮聖公会の体質の一側面が理解できる。

1919年3・1独立運動が起こった当時、トロロップは休暇でイングランドに戻っており、朝鮮に滞在していなかったため、間接的に対応するより他なかった。トロロップは3・1独立運動が起こった状況については、ある程度把握しており、次のように述べている。

私が去る夏、英国に滞在している間にヨーロッパのいくつかの新聞にその運動についての報道があった。しかし、英国では全く何の反応もなかった。この独立運動を徹底して封鎖しようと試みた日本人たちは去る夏の間に恐ろしい恐怖政治を行った。ところで、日本人たちのなかにはこれを否認したり、弁明したりする人は全くいなかった。その状況はとても悲劇的で日本帝国政府は日本総督を召還し、日本植民政府の幹部全体をこの秋に交替し、柔軟性を携えた人物を配置したようだ。これらは柔順な姿勢の斎藤総督が困難な総督を任せられ、その指導力下で活動することになる。これから私たちはすべてのことがうまくいくように願っている<sup>(31)</sup>。

トロロップは、英国にいながらも3・1独立運動の状況を幾分把握しており、独立運動が武力によって鎮圧されたことを認識していた<sup>(32)</sup>。しかし、彼は、自らの宣教対象である苦難を被った朝鮮人に対する同情感を示すというより、むしろ日本の統監府がより「柔軟」な姿勢で事件以後の朝鮮を統治することに期待を寄せていた。李在楨は、このトロロップの姿勢について批判的に「現実を現状のまま受け入れる立場」<sup>(33)</sup>と非難している。しかし、むしろ英国の出身、時代的状況などを考慮に入れると、彼の出身元である英国が各国に植民地を強いている状況であり、彼も権力側の人間で、またその中でも知識階級の出身であったため、どこまでも植民地支配者側の論理を受容していたと考えられる。彼の現実性は、結果的に朝鮮人から見ると親日的な姿勢を示していたと同時に伝道という枠に限っては、朝鮮に降り立った宣教師として朝鮮人に対する任務を遂行するという二面性を持ち合わせていた。

いずれにせよ、トロロップをはじめとする英国

人宣教師たちは、政治的な事柄への言及を好まず、中立的な立場を示した。そして、中立的な立場を示す上で取った行動は「沈黙する」という行為であった。韓国教会史家の閔庚培は、このような「政治的中立という自体が実相は反日の強い意志に違いないということが事実である。統治者に対する政治的な中立宣言は抵抗の宣言であろう。ここで私たちは宣教師たちの政治中立の原則が論理的に親韓反日の態度の闡明という事実を目撃する」<sup>(34)</sup>とする結論を下しているが、政治的「沈黙」がすぐさま「親韓反日」に繋がるという結論は、あまりにも煩雑な結論の下し方であり、個々のケースを分析することで、「沈黙」の内容に差異が見られると考えられる<sup>(35)</sup>。またチョンヘジュが閔庚培の論理にしたがいが、3・1独立運動当時の朝鮮聖公会の立場を「親韓反日」と結論付けているが、拙者の視点に従えば納得し難い。もちろん、「沈黙」するということによって一種の防御的姿勢、つまり教会組織を守る機能は果たされたであろうが、日本帝国によって支配され、排他される朝鮮人の民族精神面を宣教師たちが保守できたとは言い難い。

以上、トロロップは伝道において、親朝的な要素を持ち合わす一方、朝鮮人信徒たちの独立精神には寄り添うことができず、どちらかといえば植民地政策を肯定するなかで日朝の「公平」を保持しようとした点から親日的要素も保持する二面性があった。親日的側面を根拠づけるもう一つの理由として、彼が亡くなったときに埋葬された場所が挙げられる。埋葬地は、現在のソウル主教座聖堂の地下礼拝堂であり、「総督府の好意により主教の遺骸は大聖殿の階下堂に安置せられるように許可せられた」<sup>(36)</sup>とあるように王宮の土地であり、一般的に人を埋葬しない場所に総督府より特別扱いを受け埋葬されたことから、彼の政治性を歴史的に検討する必要がある。もし彼が3・1独立

運動を支持した側の宣教師であれば、決してソウルの中心地に埋葬されることはなかったであろう。トロロップは、朝鮮に来た宣教師として朝鮮人にも親しみを寄せつつも結果的に植民地という時代的状况により、彼の姿勢は植民地を批判せず沈黙することで、朝鮮人の独立精神に寄り添えない限界を持ち合わせており、その比重は支配者である日本側に偏っていたのではないかと推察できる。

このようなトロロップの管轄下で、趙光元は当時銀行員としてソウルで勤務し、また信徒として教会を引導するリーダー的役割を担っていた。彼は特に教会の青年たちを指導しながら、一方で民族精神を呼び起こすような活動を継続的に推進し<sup>(37)</sup>、上記で言及したトロロップの「中立」とは多少異なる活動を実施していた。つまり、宣教師と朝鮮人の間には民族の問題、政治的立場に温度差が生じていたことが推察できる。トロロップは、趙光元の地道な活動を教会で実施させるという許容の幅を持っていたとも考えられるが、過激な運動などに参与することは認めず、むしろ鎮静させる指導をしたと考えられる<sup>(38)</sup>。そのため3・1独立運動における朝鮮聖公会の朝鮮人信徒の拘束は、わずか4人のみであった<sup>(39)</sup>。以上、このような状況下において、趙光元の存在がトロロップの目に入り、ハワイへと派遣されることになる。

## ② ハワイにおける趙光元の働き

趙光元は1897年10月21日、江華島の仏教を信仰する家系に生まれた。すでに江華島は聖公会の英国人宣教師たちが上陸し活動しており、彼はその宣教師たちと接触することで影響を受け、温水里教会で受洗した。趙光元の洗礼名はノアと名付けられ、家族すべてを「ノアの箱舟」に乗せるという宣教師からの願いが込められた洗礼名であった<sup>(40)</sup>。趙光元は1914年に江華公立普通学校、続



いて仁川公立商業学校を卒業し、1921年に安田銀行で勤め、ソウル主教座聖堂で日曜学校の教師として、また伝道奨励部員としてトロロップの宣教活動に寄与した。

一方で依然としてハワイ教区の朝鮮人教会では朝鮮語を駆使する聖職者は少数であり、1923年12月7日に朝鮮人の信徒奉事者として、はじめて朝鮮聖公会から派遣された人物が趙光元であった<sup>(41)</sup>。彼はすでに尹義和という女性と結婚しており、子供もいた。しかし、趙光元の渡航は、単身であった。その理由は大きく分けて二つ考えられる。第一に、彼は思想的に国粋主義的性格を有しており、子供たちの海外での教育を容認しなかったこと。第二に、趙光元は当時では稀な一人っ子であったため両親の世話を妻に任せハワイでの福音伝道の使命を果たす必要があった二点が挙げられる<sup>(42)</sup>。

単身でハワイに到着した趙光元は、聖エリザベス聖堂の司祭キープ (James F. Kieb) を助けながら働いた。1923年の春からは、レスタリックの後を引き継ぎ聖ルカ聖堂の建築に携わったのは主教ラモス (John D LaMothe) であった。聖ルカ聖堂の建築は、財政的に困難であったため一度は否決されるが、ラモスは代わりに日曜学校の建物を建築することを約束した。その建物はハンゲル学校としても用いられることになる。1924年12月に再び財政的な基盤が整ったため聖ルカ朝鮮人宣教センターという名前の建物を建設し、1925年1月25日の使徒パウロ回心日に建築工事礼拝がキープと信徒奉事者によって捧げられた。5月3日には16年間礼拝を捧げた聖エリザベス聖堂を後にして、聖ルカ聖堂の献堂式を行い、これによりホノルルの朝鮮人信徒たちは、はじめて自分たちの教会を所有することになった。趙光元は、ここで朝鮮語の教師からはじめ、後に信徒奉

事者、聖職者として伝道活動に参加した<sup>(43)</sup>。

1926年4月に趙光元は母親が病気のため一時ソウルに帰国するも、また10月にハワイに戻り教会で朝鮮人二世たちに国語を教える一方、自身もイオラニ学校で英語を学び、説教などを無難に通訳する程の語学力を習得した。彼は1928年6月3日に執事按手を受け、1931年5月1日に主教リッテル (S. Harrington Littel) より司祭按手を受けた。1935年から1年間は米国本土のナショタハウス (Nashota House Theological Seminary) で学んでおり、ここで彼の神学的基盤がある程度形成されたと考えられる。

1931年9月17日には、トロロップの次を任された朝鮮聖公会の主教クーパー (Alfred Cecil Cooper, 1882-1964) がホノルルを訪れ、夕の礼拝において朝鮮語と英語の説教で信者たちに感動を与えたと記録している<sup>(44)</sup>。主教クーパーは、限られた時間を趙光元と過ごし、ハワイ教区の朝鮮人教会の様子を幾分把握したと考えられる。クーパーの訪問は、主に主教としての巡回が目的でハワイにおける朝鮮人信徒たちと祈りのときを共有し、ハワイの文化、風習に触れ満喫したことが報告されている。趙光元の派遣によって米国聖公会ハワイ教区の朝鮮人教会と朝鮮聖公会の交流がなされていたことを示す記録である。

趙光元の司牧の結果として聖ルカ聖堂の信徒数は、増加傾向にあった。1938年夏には、数的増加により礼拝堂とハンゲル学校を併用することが不可能になったため聖エリザベス教会内にある家屋を使用する許可を取り、信徒たちの寄付によって家屋を修復し、彼の自宅兼ハンゲル学校として用いることになった。

趙光元はハワイにおける朝鮮人信徒を司牧する一方、日本帝国から朝鮮が独立するために尽力した。彼は朴容萬の朝鮮独立団へ加入、ハワイ総支

部委員として機関誌である『太平洋時事』に携わり、国民会に加入し『国民報』の刊行に携わった。「大東亜戦争」がはじまり 1941 年には、「韓人自衛団」を組織し、ハワイにおける日本人スパイを捜索すると同時に独立資金の調達に邁進した<sup>(45)</sup>。また他にも趙光元は日本語にも精通していたため 1941 年米国放送 CICA 広報部に所属し、ハワイに居住する日本人の中でスパイなどの不審者を突き止め、ロサンゼルスに送還する役割をした。1944 年 6 月には、信徒たちの反対を押し切り、米軍海兵隊の従軍牧師として第 4 海兵師団特別機動隊に加わり、サイパン攻撃に参戦した。趙光元がサイパン戦に参戦する直前の様子が、次のように記されている。

趙神父は、朝鮮において軍人の家庭出身で、22 年間をホノルルのルカ聖堂の神父であり、47 歳であるのに上陸決定日の 19 日前に聖公会の信徒たちに「元気でいてください」と言い惜別をした<sup>(46)</sup>。

また当時の米軍海兵隊の新聞 (USCM) では「海兵隊趙神父…」という題目で記事が掲載された。ギルバートやマーシャル諸島の先頭において数千名の朝鮮人兵士たちと日本軍兵士たちが戦死するなか、サイパンでは趙光元の尽力により 6 名の朝鮮人、4 名の日本人、1 名の先住民が救出された<sup>(47)</sup>。同様のことが、『国民報』にも、次のように記されている。

すでに 11 名の捕虜がいるが、そのなかの 6 名が朝鮮人で、日本人は 4 名、先住民が 1 名である…神父は自身が (戦場を) 恐れているのを忘れて、すぐに救援作業を開始し、「米国人を恐がらないで下さい」と朝鮮語で叫び、「我々は

皆さんに衣食を供給し、医療によって助けることができます」と語った…「あなたはどこから来たのですか」と尋ね「私は朝鮮から来た」と言えば、「私はあなたたちの友人です」と言った。「米国人たちは私たちに残酷な罰を与える」と聞いています」と言えば「違います。米国人たちは私の友人であり、したがって皆さんに害を加えたりしません。むしろ、虐待を受ける人々を解放するために来ました。また皆さんの友人なのです」と言った<sup>(48)</sup>。

以上の記録からもわかるように、趙光元の海兵隊志願は、自国の解放を目的としつつ、サイパンの地において、日本軍の朝鮮人兵士を救済することが、彼の使命となっていた<sup>(49)</sup>。また彼は戦場で亡くなった人々を埋葬し、サイパン島に来ていた朝鮮人兵士たちに寄り添ったことが、次のように記されている。

日本軍の爆弾が捕虜収容所に落ち、趙は負傷者に駆けつけ、医療所に連れて行った。その後亡くなった人々に対して埋葬まで行った。それゆえ、病となり、弱った朝鮮人たちが毎日捕虜収容所に集まり、瞬間に数百人になった。この多くの朝鮮人たちは、サイパン島の日本海軍の労働者であった…趙神父は、彼らの恐怖心を取り去るため収容所の鉄条網のなかで朝鮮人たちと共に生活し、寝床を共にし、共に食卓につきもした<sup>(50)</sup>。

趙光元のサイパンでの働きは、捕虜収容所の朝鮮人たちが米国人に対する恐怖心を抱けなかにそれを緩和させる役目を果たしたと考えられる。彼がサイパンのテニアン島 (Tinian) における掃討作戦のため捕虜収容所を離れるときには、多く

の朝鮮人が「涙をもって惜別した」<sup>(51)</sup> というように趙光元との別れを惜しんだことが分かる。趙光元のサイパンにおける海兵隊員としての53日間は、彼の中で自国の独立解放を求める武装闘争であった。朝鮮が日本帝国の植民地となって35年が過ぎようとしていた時期に、趙光元における海兵隊への志願とは、自らの生命をかけた独立解放への闘いであり、その意志を、次のように記している。

万一、違う国が違う国の土地を奪ったならば、どうだろうか？…日本が私たちの土地（朝鮮）を盗んでから、すでにおよそ40年である…私たちの土地を取り返すのは簡単なことではない。私たちに機会が訪れるであろう。いまそのときが来たのだ…私は良い食べ物にありつき、良い衣服を着て、良い家屋に米国政府の保護下において、自由に生きることを望んでいるわけではない…男も女も、すべて兵隊になり、身を投じて血を流してみれば、その血によって取り戻す地への権利は永久になるのである…2500万の民衆がすべて爆弾になろうではないか…私たちの権利と思想を取り戻すため爆弾になって出だし、戦って死んだとしても、不幸に敵の手に捕まった時には、太極旗を身につけて大韓独立万歳を叫び、死のうではないか。あー熱い血を流し…先に死んで行った義士と烈士と地下でもに会い握手し…死のう、血を流そう、血の価値に権利があり、思想があり、独立がある<sup>(52)</sup>

上記の引用は、趙光元が「権利と思想」と題して記したものの一部である。彼はサイパン戦に参戦し、朝鮮の独立解放が間近に迫っていることを察して上記の文章を『国民報』の読者に向けて記した。彼は、この機会にすべての朝鮮人が独立解

放に向けて、力を注ぎ、自国の奪還に尽力しなければならないことを訴え、自らの生命をかけて朝鮮人の独立精神に訴えかけたのであった。

## おわりに

以上、趙光元という人物に焦点を定め、朝鮮人のハワイ移民の状況とキリスト教の関係、特に聖公会という一教派の朝鮮人教会の特性を明らかにした。同時に本国の朝鮮聖公会の姿勢と対照することで趙光元が抗日独立運動を展開した聖職者であることが明確になった。これはハワイに越境することにより、現地の状況に影響を受けた趙光元の姿勢であり、太平洋戦争末期の米国と日本の対立構造のなかで聖職者が米国の軍人となり、朝鮮の独立解放を求めた構図を提示することができた。

誌面の関係上、ここでは戦後の趙光元の歩みについて、言及することを割愛せざるを得ない。しかし、若干の言及を試みると、彼は朝鮮戦争が勃発する1950年から日本聖公会の神戸教区で日本人に対して司牧する。独立運動を推進した人物であるため、日本に対する憎悪心が強いと思いきや、彼は福音伝道を理由に米子で3年、神戸で3年司牧し、朝鮮人への偏見が強い時期に日本人に対して伝道し成果を残した。彼の痕跡は、今日においても日本人のなかに懐かしい思い出として残っている<sup>(53)</sup>。また日本を後にし、本国に戻った趙光元は、大韓聖公会とカトリックとのエキュメニカル運動に寄与し、聖職者を養成する教育機関で働き、後代に影響力を与えた人物であった<sup>(54)</sup>。終戦後の趙光元を考察するには、まだ資料面で十分ではないが、今後の課題として、独立解放後の趙光元について考察する予定である。また彼の死後、遺族と大韓聖公会の意向によって、独立運動家として韓国政府から表彰された<sup>(55)</sup>。最後に趙光元のナショ

ナリズムの側面を評価する上で、徐正敏の理論を用い整理する。

韓国教会史家の徐正敏は、今日まで民族教会史家として韓国教会史研究を牽引している。彼は2013年に民族教会論の再論に関する自身の立場を明確にした。その論理によれば、キリスト教は元来、反民族主義を基礎とする万民主義を選択し、世界の福音化の路線をとるが、宣教現地の文脈である国家、民族、地域、人種単位のアイデンティティが強く作用することは認めざるを得ないとする。そのなかでドイツのナチズムや日本のファシズムとキリスト教が結合して帝国主義キリスト教が誕生しており、これが徐正敏の言及するところのオフENSIVE・ナシヨナリズム（Offensive Nationalism）である。また、その一方でディフェンシブ・ナシヨナリズム（Defensive National-

ism）が存在するという。後者は徐正敏の説明によると「異なる民族主義や強力な周辺国家の実体の上で独立と自存を侵害される、言葉にできない屈辱と逼迫の中にある民族に対して現われる民族主義を意味する」<sup>(56)</sup>と規定している。

この論理にしたがって趙光元の軌跡を分析すると、植民地下における行動、特に日本帝国下において抗日独立運動に参加したディフェンシブ・ナシヨナリズムの側面と米国の軍事力の結び付いた結果を見ることができる。しかし、解放後、日本に越境し、民族の境界を越えて伝道活動に従事した。晩年は、自国に帰国し、教会が分裂し対立する状況下でキリスト教の本質を捉え直し、エキュメニカル運動に尽力した人物であり、常に現地の状況とともに自身の信仰的判断により行動を変化させ時代を乗り切った人物であることが分かる。



KOREAN MISSION CENTER での趙光元（中央）と礼拝奉仕者たち

註

- (1) 本稿は、2012年7月26日に東京・神田の韓国YMCAで開催された東アジアキリスト教交流史研究会で「米国聖公会の韓国人司祭趙光元 ハワイ・日本・韓国における歩みを通して」と題して発表したものを1945年までに限定し、加筆修正した。今後の予定として本稿の続編となる戦後篇についても叙述する予定である。
- (2) 本稿では「朝鮮」と「韓国」という表記が混在しているが、基本的に1945年の終戦までを「朝鮮」と表記し、その後を「韓国」としている。しかし、「韓国併合」や「朝鮮戦争」は歴史的用語として、そのまま用いる。
- (3) 当時、ハワイにおける農業労働者の移民政策は、1903年から1905年まで行われた政策であり、その後は「写真新婦」などの特別なケースのみにおいて、1924年までビザの発給がなされたため、それらに対しては「移民」という用語を使用する。しかし、趙光元のケースは、そもそも農業移民という枠外にあり、キリスト教の伝道者という側面と同時に現地で独立運動を推進し、軍人として志願することで武装闘争に加担した事実は、日本政府当局から十分に敵視される存在であり、彼のハワイへの渡航は前述の移民とは異なる亡命的性格を有しているため、本稿では「越境」という用語を使用する。
- (4) 이덕희 『하와이의 한인 성공회 교회』 『한국기독교와 역사』 한국기독교역사학회편, 한국기독교역사연구소, 2013. 205-236頁。
- (5) 이재정 『대한성공회백년사』, 대한성공회출판부, 1990.
- (6) *The Morning Calm* は、朝鮮聖公会の初代主教コーフが朝鮮宣教の募金活動を訴えるために1890年3月よりロンドンで創刊された刊行誌である。内容は、医療宣教のための「海軍病院基金」に関する報告、SPGが関係している宣教地域における活動のための祈りの課題などを掲載し、英国において6dime(年間購読料)で販売されたものである。終戦以前は1896年の第67号よりおよそ60頁の分量で季刊誌として発刊され、1939年10月号まで約50年間で241号発刊された。
- (7) 『国民報』は、1913年8月1日から大韓人国民会において発刊され、1968年12月25日廃刊するまで全24巻刊行された週刊誌である。独立運動、ハワイ移民史の研究においては、欠かすことのできない一級資料である。
- (8) 李里花「ハワイ・コリア系移民のアイデンティ

ティに関する歴史社会学的研究〈1903-1945〉:トランスナショナル・アイデンティティの構築」一橋大学大学院社会学研究科博士論文, 2011. 33-35頁。ハワイへの朝鮮人移民が2年で廃止された理由は、日露戦争に勝利し、まもなく朝鮮を植民地支配しようとしていた日本帝国の圧力が挙げられる。ハワイにおける農業移民は、当時日本人66%, 朝鮮人10%, 中国人9%となっており、ハワイの日本人会から日本政府に対して新たに行われていた朝鮮人移民は、日本人の利害に反するという嘆願書が提出されていた。これを受けた日本政府は朝鮮の移民制度廃止に向けて大韓帝国の高宗に圧力をかけ、1905年4月に移民制度の廃止を促した。

- (9) 웨인 패터슨 『아메리카로 가는 길』, 들녘, 2002. 49頁。移民政策に関わった宣教師アレンは、朝鮮人の移民政策が米国の法律において、不法であることを認識しながらも、朝鮮人が中国人よりも良い働き手であるということに自負しつつ、朝鮮人移民を押し進めた。
- (10) 李里花, 前掲書, 71-72頁。1909年に安昌浩(1878-1938)を代表とする「国民会(Korean National Association)」が結成された。後に規模が拡大し「大韓人国民会」に改称し、祖国独立運動の拠点がサンフランシスコからハワイへと移った。会員の大半はハワイに在住しており、資金集めのためには拠点をハワイに移動する必要があった。安昌浩は、「民族の父」と称されるように日本帝国による植民地侵略に抵抗し、抗日独立運動を展開したプロテスタントキリスト教信徒の引導者であった。
- (11) 韓国基督教歴史研究所 『韓国キリスト教の受難と抵抗』, 新教出版社, 1995. 105-107頁。李承晩は、ハワイにおいてメソジスト教会との深い関わりを持っており、韓人寄宿者学校の責任者として学校と教会の財政権を握っていた。しかし、メソジスト宣教師たちは、李承晩から財政権を剥奪し、教育のみをさせようとした。彼はそれを不服とすることで宣教師の支援を受けないで同胞学校を設立し、これを契機にハワイの朝鮮人社会は、李承晩派と宣教師派と分裂する。また一方で国民会の朴相夏らが公金流用したという記事が『太平洋雑誌』という李承晩側の雑誌によって非難されることで、義理の兄弟を結んでいた李承晩と朴容萬は決別することになる。そして、同胞社会が李承晩派と朴容萬派に分裂した。
- (12) 이덕희, 前掲書, 207頁。
- (13) *Handbooks on the Missions of the Episcopal*

- Church*, No. VIII. Hawaiian Islands. New York: The National Council of the Protestant Episcopal Church, Department of Missions, 1927. p. 22.
- (14) *Ibid.*, pp. 25-28. 大谷尚文『ハワイ聖公会史』, グッド・サマリタン教会, 1990, 27-28頁。
- (15) 이덕희, 前掲書, 208-209頁。
- (16) 「信徒奉事者」は、日本聖公会で今日使われている 'Lay Reader' の訳語であり、カトリックでは「読師」、正教会では「誦経者」と用いる。信徒奉事者は、 sacrament の執行を除いた信徒の奉仕職を意味しており、ハワイの朝鮮人教会における 'Lay Reader' の役割も司式、説教など多様な働きを担っていたことから、この用語を用いている。
- (17) 이덕희, 前掲書, 212-213頁。
- (18) Rev. c. Fletcher Howe, *THE FIRST FIFTY YEARS OF St. Elizabeth's Church Honolulu, Hawaii 1902-1952*, Printed in the United States of America by the Advertiser publishing CO., LTD., Honolulu, 2011. p. 19.
- (19) 이덕희, 前掲書, 216頁。1908年には14名の堅信と12名の洗礼を記録している。翌年の礼拝でも44名の信徒が出席しており、信徒数が増加していたことが分かる。
- (20) 同上, 217-218頁。
- (21) 이덕희『하와이 대한민국민단 100년사』, 연세대학교 대학출판문화원, 2013. 276-277頁。朴相夏は1913年に、趙炳堯は1936-44年まで国民会の総会長を務めた人物である。
- (22) 웨인 패터슨, 前掲書, 2003. 107頁。ベタソンの分析によれば、聖公会の朝鮮人信徒が増えはじめたのは、信仰的な目的によるものではなく、ハワイの朝鮮人社会の政治的葛藤のなかで、メソジスト教会が支配するハワイの朝鮮人社会に批判的な人々が聖公会に流入したとしている。
- (23) Rev. c. Fletcher Howe, *op. cit.*, p. 19. 朴丞駿は1913年にカリフォルニアの太平洋神学校 (Church Divinity School of the Pacific) に派遣され、米国聖公会における最初の朝鮮人司祭となった。
- (24) 이덕희, 前掲書, 219-220頁。
- (25) 이덕희, 前掲書, 219-220頁。李徳姫によると、朴丞駿の辞任は、妻方の父母よりの聖職に対する相当な反対があり、扶養しなければならぬ家族があることなどを理由に辞任した。聖職を辞任した理由として、政治的葛藤が生じていた可能性も仮定できるが、国民会の週刊誌『国民報』には、
- その後も朴丞駿が不動産仲介業として、ハワイの朝鮮人社会のなかで貢献している記事を取り扱っており、ハワイで経済的に成功した朝鮮人の一人でもあった。
- (26) 同上, 221-223頁。
- (27) 이재정, 前掲書, 参照。
- (28) Turner, "Bishop's Letter", *The Morning Calm*, Vol. 17, No. 111, January. 1907. p. 3.
- (29) Trollope, "Letter from the Bishop-Designate", *The Morning Calm*, Vol. 22. No. 129. July. 1911. pp. 78-79.
- (30) A. Hamish Ion, *ibid.*, p. 204. シャープ (Aubrey Lyster Sharpe, 1868-1958) がトロロップの主教就任について彼が「反日」的である理由で反対するなどしていた。しかし、この際にトロロップは SPG の事務局長であったモントゴメリー (Henry Montgomery) に手紙を書き、初代コーフと働いた際に痛切に日本を批判した事を述べつつ、彼の真意は両国が相互に「調和」し、「公平」になることを望んでいる真意を伝えている。
- (31) "The Bishop's Letter," *The Morning Calm*, Vol. 31, No. 162, January 1920, p. 4.
- (32) A. Hamish Ion, *ibid.*, pp. 205-206.
- (33) 이재정, 前掲書, 146頁。
- (34) 민경배『韓国基督教史 (改正版)』, 大韓基督教出版社, 1991. 319頁。전해주「성공회 병천교회의 3・1 아우내 만세운동에 대한 기여」, 성공회대학교 석사학위논문, 2006.
- (35) 同上, 50-51頁。チョンヘジュの論文は、閔庚培の論理によって、3・1独立運動当時の朝鮮聖公会の立場を「反日」と結論づけている。韓国教会史研究において、閔庚培の影響は多大であるが、再考の余地が残されている。
- (36) 「トロロップ主教の遭難とその葬儀」『基督教週報』, 第61巻第14号, 1930年12月12日, 5頁。
- (37) 洙成植「趙光元神父」『聖公会新聞』, 2009年11月15日。趙光元は、教会の青年たちを指導する一方で、教会の伝道奨励部員などを勤めた。ここでは積極的な伝道計画の樹立や民族的な教会運営、一般信徒の参与などが強調された。
- (38) 松坂勝雄「大韓聖公会の今昔」(年度不明)。松坂は在朝日本人教会を司牧した聖職者である。彼のトロロップの回顧録によれば、「同師(トロロップ)の変わらぬ教えは、信者たるものは、全能の神の御支配、御指導の下に謙遜な生活を送るべきで、決して政治問題に関係して、つまらぬ運動などをしてはならない」という言及をしていた。この「つまらぬ運動」とは、松坂に脚色された表現

- かもしれないが、いずれにせよ3・1独立運動のことを指している。
- (39) 「騒擾事件入監者ノ宗教別表」『朝鮮騒擾事件(5)』(防衛省防衛研究所), 1919。4人という数は、刑務所への入監者であり、のちに釈放されている。長老会やメソジスト信徒が独立運動を積極的に進めたことと比較すると極めて少ない数である。ちなみに1920年度の朝鮮聖公会信徒は3,000人を超えていた。長老会やメソジスト教会と3・1独立運動の研究に関しては澤正彦の『未完 朝鮮キリスト教史』(日本基督教団出版局, 1991)が明快に論じている。しかし、当然のことながら聖公会の状況とは異なる地域的、教派について論証している。
- (40) 趙炳璿インタビュー, 2013年4月5日。趙炳璿は、趙光元の息子。
- (41) 이덕희, 前掲書, 223頁。洙成植, 前掲書。朝鮮を出発したのは1923年11月7日、12月7日にハワイのホノルルに到着したと考えられる。
- (42) 趙炳璿インタビュー, 2013年4月5日。
- (43) Rev. c. Fletcher Howe, *op. cit.*, p. 22.
- (44) Cecil, Letters from The Bishop, *The Morning Calm*, Vol. XLIL, No. 210, January 1932, p. 2. 李徳姫は主教クーパーの訪問を1932年9月17日としているが、正確には1931年9月17日。「ホノルルで朝鮮人聖職者、趙ノア神父と他信徒たちが私の到着を待っていた。私は時間が限られていたので、聖ルカ聖堂、孤児院、美術館、大学、宣教ビル、すばらしい景色を見てから夕食に中華料理を食べ、夕の礼拝に20人程の信徒を前にして、朝鮮語と英語を混ぜて説教した」。
- (45) 『国民報』, 1937年12月22日。「聖ルカ聖公会学生たちが独立軍を助けるために血誠金3元を集める」
- (46) 『国民報』, 1945年5月9日。
- (47) Jim G. Lucas, *Father CHO...MARINE*, U.S.M.C. (発行日不明), pp. 1-4. 発行日は不明であるが記事の内容から1945年1月頃に取り扱われた記事であることが分かる。
- (48) 『国民報』, 1945年5月2日。
- (49) 『韓国日報』, 1972年10月8日。「趙ノア神父と53日間サイパン戦争中に生活をした第4米海兵師団のW. L. サンダース将兵は彼を『救世主』と言ったという」。
- (50) 『国民報』, 1945年5月9日。
- (51) 『国民報』, 1945年6月6日。
- (52) 『国民報』, 1945年7月4日。
- (53) 信岡章人「敬愛するヨブ兄」, 1999年9月13日。
- (54) 趙光元「聖公会の特殊使命」『基督教思想』Vol. 2, No. 5, 1958, 97-98頁。
- (55) 『連合ニュース』, 1999年8月13日。趙光元は1999年に独立遺功者として国家に登録された。独立遺功者の『功勳録』にはハワイにおいて独立資金を調達し、臨時政府に支援したことなどが評価されて、建国勲章愛国章を追叙された。
- (56) 徐正敏「韓国長老会史と『民族教会論』の再論」, 『基督教思想』, Vol. 56, No. 2, 大韓基督教書会, 2013, 233頁。